

データ利活用による授業改善の進め方

1 データ利活用の考え方

学習指導要領総則の解説には「各学校においては、各種調査結果やデータ等を活用して、児童生徒や学校、地域の実態を定期的に把握し、そうした結果等から教育の目的や目標の実現状況や教育課程の実施状況を確認し分析して課題となる事項を見だし、改善方針を立案して実施していくことが求められる。」と示されている。一見するとデータ利活用は「学校として取り組むもの」と思われるかもしれないが、個々の教師の活動の積み重ねが学校の教育課程であること、データ利活用が授業改善の一側面であることを考えると、データの利活用は教育活動をより良くするための普遍的・日常的でポジティブな営みであるといえる。

これらを踏まえて、日々の活動に以下のような実践例を各学級で取り入れることで、様々な視点で子供たちを見取り、子供たちの思いを反映させられるような授業改善を進めていくことが望ましい。

子供たちの変容のために現状を定量的に把握することからスタートし、R-PDCAサイクルを適切に回すことで**学習指導等の在り方を変えていく**ことが重要。



2 データ利活用の実践例とポイント

(例) 授業の理解度や教科への興味関心を高めたい → Rで「授業がわかる調査の項目」を流用

R 授業がわかりますか？（理解度）
授業が楽しいですか？（興味関心）を開く
(Google フォーム活用で短時間で可能となる)

※特定の教科のみでもよい。(例：社会のみ、理科のみ)
※五件法（5つの選択肢から選ぶ）が分析しやすい
※市では肯定的な回答の割合の和を指標としている。
(理解度なら「よくわかる」と「だいたいわかる」の和)
※必要に応じて理由を一緒に回答させる。

結果例

パターン①

興味関心は高いが理解度が低かった

パターン②

理解度は高いが興味関心が低かった

Point：計画や目標を立てるには、R (Research) により**子供たちの現状を可能な限り把握**しておくことが大切。

P 結果の理由や背景を分析し、解決策やその目標を設定する。

パターン①

例えば、分析の観点に過去の「指導の重点・主な施策」のグッドプラクティスを用いる。特に自分で実践できていないポイントがあれば、次の単元や次の学期では必ず毎回の授業でそのポイントを実践するといった目標を設定する。

パターン②

学習内容の意義を伝えられているか、子供との関係性を構築できているか、子供は安心して授業に臨んでいるかなど、「楽しさ」を様々な子供の視点に立って検討する。そこから自分で仮説を立て、仮説に応じた具体的な解決策を設定する。

Point：解決策はできるだけ**具体的に**、**期間**（この例の場合は単元ごとや学期ごと）も含めて設定する。

D 設定した解決策を実施する。

C 設定期間終了後に同じ質問を行い、解決策の効果を検証、必要に応じて補足的な調査を行う。

A 次のサイクルを回す。

Point：数値は参考にするが、**子供の見取りを大事**にする。そして設定した指標の観点で**自分の行動を振り返り、行動改善できたかが重要**である。

Rの別の視点

自分の授業実践を振り返りたい

→ Rで「埼玉県学調の質問紙項目」を流用

質問例：○学期の◇◇(教科)の授業で次のようなことはどれくらいありましたか？

- 授業の始めに、今日はどんな学習をするのかをつかんでから学習に取り組んだこと
- 授業の終わりに、授業で学んだことをふり振り返り、自分がわかったことやわからなかったことを理解したこと

Point：指導実践に対する認識は、教師と子供の間でギャップが生じやすい。上記の質問はそれぞれA-L指導用ルーブリックにおいて授業の根幹としている視点1と視点5に関するもので、授業の見通しと振り返りを実践できているか**子供の視点で確認**できる。



Researchの入口



児童生徒向けのアンケート (Google フォーム) を Google ドライブ上に保存